JPO通信
日本カトリック正義と平和協議会ニュース・レター
VOL. 207
2017 DEC.

特集 となりのウリハッキョ（朝鮮学校）

ウリハッキョへつながる手引き

中井　淳（イエズス会）

米国の大統領にドナルド・トランプ氏が就任して後、急激に朝鮮民主主義人民共和国（「北朝鮮」というのは正式名称でもなく、差別的なニュアンスも感じるため、以下「共和国」と呼ぶ）を巡る東アジアの政情が緊張化している。メディアは盛んに共和国に対する私たちの不安を煽り立てようとする。一面的な報道しかなされず、その背景にある政治と軍事産業のからくりなどは、ただ新聞紙面やテレビ報道を見るだけではわかりづらい。フランシスコ教皇は壁を作ろうとするトランプ大統領に対して、「キリスト者は壁を崩し、橋を作る人でなければならない」と言われた。日本と他者、日本人と外国人という壁を作ろうとするナショナリズムが強まっていく中、私たちは日本社会が差別し抑圧しようとする人々と連帯を強めていきたいと思う。本稿が、みなさんがあまり身近に感じてこなかったかもしれないウリハッキョ（朝鮮学校、在日の人々は、朝鮮学校のことを親しみを込めて「ウリハッキョ・わたしたちの学校」と呼ぶ）に関心を持ち、在日の人々と連帯していく機会、新しい視野で東アジアの現実を見るきっかけとなれば幸いである。

私とウリハッキョ

今年の４月の初め、私は韓国での語学研修と市民運動参加の１年間を終え、下関に戻ってきた。あまりにも韓国での日々が出会いと刺激に満ちていたからだろう、下関に戻ってきても心ここになし、という感じだった私が、ともかく向かった先は、下関のウリハッキョだった。下関にも、学生数は33名と決して大きくはないが、幼稚園から中学校まで一貫のウリハッキョがある。下関は、植民地時代に釜山から多くの朝鮮人が日本に連れられてきたとき、最初に上陸した場所である。戦後も、様々な理由で日本に残らざるをえなかった朝鮮人たちが形成したコーリアンタウン、そしてウリハッキョがあるのだ。

それから間も無くして、韓国のモンダンヨンピルというグループが下関を訪れるという知らせを聞いた。モンダンヨンピル（ちびた鉛筆という意）は、クォン・ヘヒョ氏という俳優が、2011年の東日本震災で被災した仙台のウリハッキョを支援することから始まった、ウリハッキョの支援団体である。毎年会員たちが全国のウリハッキョを訪ね、音楽公演と子どもたちとの交流会を行っている。私は、韓国滞在時、ソウル日本大使館前での朝鮮学校無償化キャンペーンに参加した縁で、モンダンヨンピルと知り合い、クォン・ヘヒョ氏に「いつか下関にも来てください」とお願いしたのだが、こんなに早く現実になるとは。下関のウリハッキョに、モンダンヨンピルを受け入れるための準備委員会が立ち上げられ、日本の支援者たち、校長先生と諸先生方、父母の会のメンバーたちが定期的に集まり準備を重ねて行くことになり、その中に私も入れてもらうことになった。

日本社会の中で差別を被ってきたウリハッキョ

ウリハッキョは、戦後、日本に残った在日朝鮮人たちが子どもたちに朝鮮語を教える国語講習所として始まった。しかし、絶えず日本政府によって閉鎖の危機にさらされた（➡ p. 4ウリハッキョインタビュー）。2010年から、日本でも「高校無償化」制度が実施されているが、民主党政権も自民党政権も、政治的な理由を絡ませてウリハッキョを無償化から排除してきた（➡p. 9「高校無償化制度を通じて朝鮮学校について考える」）。また、一部の地方自治体は高級学校だけではなく、初・中級学校、幼稚園の段階にあるウリハッキョへの公的補助まで、一方的に停止したのである。ウリハッキョの保護者は、当然のことながら、日本人と全く同じ割合で納税義務を果たしているのにもかかわらず、子供の教育に対する公的助成がないのである。

ウリハッキョの授業風景（1）

ウリハッキョの授業風景（2）

それでもどうにかしてウリハッキョは同窓生、保護者たちの支援のもとにやってきた。先生たちは、給料が出ないという日々も過ごしてきた。それはひとえに、「子どもたちが自分らしくいられる場所」「自らが何者であるかを教えてくれる場所」を守るためであった。

そんなウリハッキョの人々にとって、モンダンヨンピルが自分たちの学校に来て、応援してくれることは、どれだけ大きな励ましとなったことだろう。韓国にもウリハッキョの大切さを

理解してくれる人たちがいた。「ウリマル（朝鮮語）を守ってくれてありがとう」と言ってくれる人たちがいた、自分たちのやってきたことは決して間違っていなかったのだ、という感動である。

ウリハッキョが担う平和の架け橋というミッション（使命）

ウリハッキョと関わりを深めると、今まで知らなかった共和国の一面を知ることができるようになる。

モンダンヨンピルが起爆剤になったのだろうか、それから下関のウリハッキョの保護者たちは、市民たちがもっとウリハッキョを身近に感じることができるような催しを積極的に企画し始めた。９月には、下関の映画館を借り切って「蒼（そらいろ）のシンフォニー」（2016年）が上映され、朴英二監督も駆けつけた。「蒼のシンフォニー」は茨城のウリハッキョの生徒たちを主人公に、彼らが共和国に修学旅行に行った

わたしのウリハッキョ

私は今年の３月に15年間通い続けたウリハッキョを卒業した19歳です。幼稚園からなんの迷いもなくウリハッキョに通い15年間自分がどんな人で、どんな民族に属するのかなど、“私”というものを教えてくれました。私が幼稚園から通ったウリハッキョは人数も少なく、他の学校に比べたら古くて小さな学校です。でも、そこにはたくさんの人たちの血と涙がにじんだ愛情たっぷりな学校です。これは私だけではなく、在校生も卒業生も学父母（ハクブモ）たちも口をそろえて言うでしょう。なぜなら、苦しい時こそ、難しい状況にあった時こそ皆が一つに力を出し合い、時には口論もしながら死にものぐるいで守り抜いたものだからです。私はそう思います。

守り抜いたこの場所で学べる喜びを言葉に表すことができません。私のウリハッキョに対する想いは言葉に表すと何かとても簡単に聞こえてしまい、もったいない気がします。それほどウリハッキョに対する愛や感謝は大きく、私という人間を育ててくれた原点とも言えます。それは在校生であった時よりも卒業したからこそ思うこともあります。3月に卒業し、１年後に留学することを漠然と決めたので、進学もせず就職もせず、アルバイトと勉強の毎日です。正直、卒業前は大学も行かず仕事もせずでラッキーと軽くみていました。ですが現実はそう甘くなく、毎日休みなく働き、夜遅くから勉強となるとやる気も失せ、本当にこのままでいいのかと何度も悩みました。後悔もしました。だけどそんな時、母校の行事で後輩たちや先生たちに会うと、毎回何かと気づかされるものがあります。学校一つで、後輩たちの姿一つで、自分が卒業の時どんな覚悟でこの道を選んだのかを思い出させてくれるのです。私はこの後輩たちのためにその笑顔をこの先もずっと守っていくために、今頑張らなきゃいけないんだって思えるんです。

こんなに素晴らしい場所ってあるのでしょうか。急に日本社会に出ていろいろ悩むときもあるけど、やっぱりそこでも私らしく在日朝鮮人として胸張って生きていくことが今私ができることじゃないかと思います。今までずっと私を守り育ててくれたウリハッキョや両親に、次は私の成長した姿を見せる番だと思うんです。いつも後輩たちにとって立派な先輩であるように。

皆さんには自分の一番居心地の良いものはありますか？私にはあります。それはウリハッキョです。私の原点でありスタート地点です。私の人生にとってかけがえのない経験や友だちを与えてくれました。私はそんなウリハッキョをこれからも守っていきます。

李鮮芽（リソナ）（山口朝鮮初中級学校卒業生）

出演者と観客が一つになるモンダンヨンピルコンサート

その行程が主材となっている。これまでにもウリハッキョを題材にした映画はいくつかあったが、監督が韓国人だったため、共和国訪問の撮影ができなかった。しかし朴英二監督はウリハッキョの卒業生なので、何度も共和国に赴いているという。

映画には、ウリハッキョの修学旅行生たちを受け入れる共和国の人々、交流する学生たちが登場する。それは私たちが普通メディアを通しては見ることのできない共和国の一般人の姿である。日本にいる同胞たちを歓迎し、温かく接する人々の素朴な姿である。

「共和国には、日本社会が失ってしまった人間らしさのようなものがある」と監督は言っていた。その一端を確かに垣間見ることができる映画だ。メディアで登場する、共和国に行ったこともない自称北朝鮮専門家よりも、何度も足しげく通い、人々と交流してきた監督の伝える共和国はリアルである。ウリハッキョの人々と関わることを通し、私たちは新しい目で共和国を見る。そこには私たちと変わらない心と感情を持った一人一人の人間がいるのである。

このように、ウリハッキョには東アジアの平和への特別なミッションがある。彼らにとって、祖国は南と北に分断された国ではなく、一つの朝鮮なのだ。韓国籍であれば、自由に韓国にも行くことができ、共和国と韓国の両方を知っている。だからこそ、祖国の統一に向けて誰よりも強い願いを持っている。

最後に、「ハナ（一つ）」という歌の歌詞で締めくくりたい。ウリハッキョの卒業生が作ったこの歌は、祖国の統一への思いを見事に表現している。

「私が生まれた時から　愛する祖国は二つだった
悲しい歴史がこの地を引き裂いても
心は互いに探し　呼びあったよね
頬ずりしようか、抱きしめようか
夢にまで惹かれあう私たち
初めて会うのに　懐かしい顔
胸にはりついた痛み　全て溶かそう
共に歌おう　共に歌おう
この喜びを誰に聞かせようか
この歌を　この踊りを　希望を　明日の私たちに」

ウリハッキョ　インタビュー

10月24日、山口朝鮮初中級学校の二人の先生にインタビューをしました

インタビュアー：中井　淳　山本きくよ（援助修道会）
呉栄哲（オヨンチョル）校長先生（山口朝鮮初中級学校校長）
朴維理（パクユリ）先生（山口朝鮮幼稚園教員）

インタビュアー：朝鮮学校の成り立ち、学校数などを教えてください。

呉校長：1910年に日本が朝鮮を植民地化すると、1912年には日本にはわずか317名しかいなかった朝鮮人が、39年になると96万人になっていました。第二次世界大戦時の強制連行により、45年の日本の敗戦時には、240万人の朝鮮人がいました。敗戦と同時に民族解放を迎え、6ヶ月

の間に140万の同胞が故郷に帰りましたが、様々な理由で残らねばならない者もいました。同胞たちは、故郷へ帰るという喜びと同時に心配事がありました。それは子供たちが、36年間の植民地時代のために、日本語しか知らないということでした。故郷に帰った時に、故郷の人々と意思が通じ合えるようにしなければならないという切実な思いを込めて民族教育がスタートしました。山口でも解放後、すぐに「国語講習所」として寺小屋式の国語講習から始まりました。

地域の人々への公開授業

1948年、山口県教育部長が「学校閉鎖命令」を出しました。全国各地でも知事が閉鎖令を出し、各地で激しい反対運動が起こり、中でも大阪・神戸の阪神教育闘争では一人の死者と多くの検挙者が出ました。49年４月４日に「団体等規正令」が発令され、朝連（在日朝鮮人連盟）が解散して、1949年10月19日都道府県知事は朝連経営の学校とみなした92校に対し、閉鎖と接収を命じたのでした。その後1955年に在日本朝鮮人総聯合会が新たに結成され、本校は1956年に創立されました。その後、朝鮮学校は多い時には全国に158校ありましたが、現在は66校です。

そのような困難な状況の中、共和国は、ずっと支援金を送り続けてきてくれたのです。その感謝の気持ちはずっと続いています。しかし、2002年、日朝首脳会談以後、拉致問題が焦点化し、大きなショックを私たちも受けたし、傷つきました。日本社会からの風当たりも強くなりました。今の子供たちは、この苦しい時期に生まれた子供たちです。

朴先生：当時私は小学二年生だったのですが、私服で登校しなければなりませんでした。

インタビュアー：朴先生はなぜウリハッキョの先生になろうしたのですか？

朴先生：私は小学校からウリハッキョに通い、高校二年生の時に、ウリハッキョに通わない在日の子供たちに朝鮮語を教える夏期学校に参加し、小さい子がウリマル（私たちの言葉）を喋るようになっていく姿に感動し、子供たちがウリマルが話せるようになる手助けをしていきたいと思ったんです。そして、私自身は日本の幼稚園に通ったのですが、子供たちが幼稚園の時からウリハッキョに通っていたならば、もっと朝鮮人としてブレないで生きていくことができるのではないか、と思い、幼稚園の先生になろうと決心したのです。

呉校長：社会が厳しく当たってくる中で、子供たちが心を休められる場所、自分自身でいられる場所はウリハッキョだけなんです。このような場所を後の世代の子どもたちに残していきたいという思いでやっています。

インタビュアー：ヘイト・スピーチなどで子どもたちが傷つくと思いますが、どのようなケアをしていますか？

呉校長：ヘイト団体が下関の駅前でスピーチをしたことがあります。そういうときは、近くに行ってはいけない、と言っています。実際に子どもたちが安心できる場所はここしかありません。マスコミやネットを通じてそのような言論に触れることになりますが、子どもたちは、そのような言論を意識してシャットアウトしています。

インタビュアー：どのようにその傷を子どもたちは乗り越えていくのでしょうか。
呉校長：私には二人の息子がいますが、例えば、ヘイト団体がうちわを配っていれば、上の子は現実路線で、うちわくらいなら受け取るのは問題ないだろうと、そのうちわで風を扇ぐ一方で、下の子はそんなうちわは受け取れない、と投げ捨てます。子どもたちは、ウリハッキョでの生活を通し、自らが、何が善で何が悪なのかを学び、生活の中で判断していきます。

ところで、私たちの使う朝鮮語は少し変わっているのです。在日の文化が育んできた朝鮮語と言えるでしょう。植民地時代に日本に連れてこられた朝鮮人の多くは南の出身だったので、南の方言が入っていて、日本語的な抑揚があり、北朝鮮特有の単語があります。日本で暮らす子どもたちの母語は日本語です。ウリハッキョの授業と生活は朝鮮語で行いますが、子どもたちの母語に近づけながら、この独自の言語を通して、どのように生きていくのかという世界観を育んでいくのです。

インタビュアー：ウリハッキョで育ててゆく世界観という話ですが、この世界、社会の中でウリハッキョが持つ役割、使命について話していただけますか。
呉校長：この前小学５年生の子供たちに将来の夢は何かを聞きました。パティシエになりたいという子供がいたり、様々な夢を語るのですが、その中に「お金持ち」と答えた子がいました。なぜかと聞くと、「お金持ちになってウリハッキョに寄付したい」と言いました。子どもたちは、心の故郷であるこのウリハッキョに自分の人生をつなげていき、そのたずさわりの中に生きていきます。
朴先生：朝鮮人としてぶれない学生たちを育てたいなと思います。

インタビュアー：ウリハッキョの子どもたちにとっては、朝鮮は、韓国と共和国という風に分断された祖国ではなくて、一つの朝鮮という祖国だということも、大きな意味があるように思います。

右奥から時計周りに、中井神父、シスター山本、朴先生、呉先生

呉校長：そうですね。子どもたちに世界の絵を書くときには、分裂されていない一つの朝鮮なんです。私の両親は大韓民国にも共和国にも行きます。そのような意味で、橋渡しの役割を持っていると言えるでしょう。だから、日本にある民団（在日本大韓民国民団）も総連（在日本朝鮮人総聯合会）も自分たちの目線でいがみ合うことはないんです。

インタビュアー：故郷は一つの朝鮮だという思い。今年の６月に韓国から、日本のウリハッキョを支援するモンダンヨンピルが音楽公演と交流のために下関を訪れました。その時の先生たちの感動は、韓国も自分たちのことを忘れていなかったという感動だったのでしょうか。
呉校長：「忘れられてなかった」というよりも、私たちが今まで努力して守ってきたことが「認められた」という思いでした。下関公演の後のモンダンヨンピルの参加者たちの感想文を読んで感動しました。「ウリマル（私たちのことば）を日本の地で、ずっと守ってくれている同胞たちがいた」と書かれ、ああ、認められたのだ、私たちがやって来たことは間違っていなかったのだと思って感動したのです。
朴先生：韓国はウリハッキョをどう思っているのだろうという思いが昔からあったので、彼ら

が私たち、ウリハッキョを大切にしてくれているのだ、忘れられていなかったのだ、という喜びが確かにありました。

インタビュアー：最後の質問ですが、ウリハッキョで働きながら、一番嬉しいなと思うときはいつですか？

朴先生：ソンセンニム（先生）になりたいと思って勉強してきましたが、実際にソンセンニムになってみると、学生の時には知らなかったソンセンニムの苦労があります。その苦労を感じながらも、子どもたちが「ソンセンニム！」と駆け寄ってきてくれる時に、喜びを感じます。この苦しい情勢の中で、子どもたちが笑いながら、ウリマルを話し、ウリノレ（わたしたちの歌）を歌い、踊り、ウリノリ（わたしたちの遊び）をしている姿をみる時、本当に嬉しく思います。

崔勇太君と李鮮芽さん

呉校長：苦しいことがいっぱいあり、33年この仕事をしてきましたが、もうやっていられない、という時が多々ありました。それでも、卒業式の時の卒業生の「コマッスムニダ（ありがとうございました）」という言葉を聞いた時に、やっぱりやってよかった、と思うのです。

僕たちの声を聞いて下さい

僕が通っている朝鮮学校には、国や市からの補助金が届きません。
僕は、どうして国や市からの補助金が出ないか、考えたりするときがあります。
僕のオモニ（母）や、朝青（在日本朝鮮青年同盟）のヒョンニン（兄貴）、同胞、そして日本の方々が毎月県庁や市役所で抗議活動をしています。
でもうまくいかないみたいです。
どうして僕たちの学校だけ、補助金が支給されないんだろう。
少し前には、京都の朝鮮学校にヘイトスピーチをしたり、神戸の朝鮮学校では襲撃事件が起きたりしました。
僕はみんな人間同士、平等に生きていければいいと思います。
僕はこう思ったりもします。補助金が出ないのは、日本政府が100%悪いわけではないかもしれません。
もしかしたら日本政府に、お金がないのかもしれません。
まずは、お互いのことをよく知ることが大事だと思います。
そうすれば、お互いもっと仲良くなれると思います。
僕も、日本の友だちが沢山います。
一緒にサッカーしたり、大好きな友だちばかりです。
これからも、仲良くしていきたいし、もっと友達が増えるといいなと思います。
一日でも早く、朝鮮と日本が国交を結んで、親善を深められるになれば、いいと思います。
そのためにも、僕自身、朝鮮学校で思いっきり学び、日本のみなさんに朝鮮学校のいいところを少しでも分かってもらえるように努力していきたいです。

崔勇太（チェヨンテ）（山口朝鮮初中級学校当時６年生／現在中学２年生）

ひとつぶ

原発のない世界を目指して

古泉　肇（六甲学院中学校・高等学校）

2017年10月11日のバチカン。雲一つない晴天の下、サンピエトロ広場で行われた教皇による一般謁見の席上、髙見三明大司教が教皇フランシスコに司教団メッセージ「原子力の撤廃を－福島原子力発電所事故から５年半後の日本カトリック教会からの提言」を手渡しました。そしてこのメッセージに添えて私がプロデュースしたドキュメンタリー映画『わすれない　ふくしま－2017年４月完成－』（四ノ宮 浩監督）が参考資料として教皇様に献上されました。この映画のプロデユーサーを引き受けてから６年あまりの間、私はいつか完成した映画を教皇様に献上しようという望みを持っていました。その望みが叶ったことは私にとって大きな喜びです。しかしながら10月11日はゴールとは考えません。むしろ私にとってもっと大きな望みである「原発を必要としない世界を創る」ための第二の「スタート」であると考えています。

第一のスタートは東日本大震災が起こった時です。その日私は、地震による被災地の映像をTVで見て、自分自身が体験した阪神・淡路大震災のことを思い出しました。そして今の自分にすぐに出来ることは何だろうかと考えました。ちょうどその時、私は四ノ宮監督から、東日本大震災をテーマにドキュメンタリー映画を制作したいので協力してもらえないかと頼まれていました。四ノ宮監督とは、監督が以前制作したフィリピンのゴミ捨て場で暮らす子供たちを描いたドキュメンタリー映画を、学内で上映したことから知り合いました。映画を作りそして広く日本や世界の人たちに観ていただくことが私の役割ではないか、そのように感じた私は映画制作に協力することにしたのです。しかしながら映画の完成までの道のりは険しいものがありました。まず苦労したことは、被災者の方々の中で取材に応じていただける方がなかなか見つからなかったことです。見つかったとしても取材の途中で断られてしまうことも何回もありました。結果的に、原発事故による全村避難が続く福島県飯館村（2017年２月現在）と、そこから避難した家族、特にフィリピン人のつれあいがおられる家族の取材が許され、映画が完成したのです。後日分かったことですが、地震直後、四ノ宮監督のように被災地に入って撮影を始めた映画監督は他にもいました。けれどもその人たちの多くは、原発事故の被災者の取材を始めると企業のスポンサーが急に降板してしまい、資金不足により映画制作を断念せざるをえなかったそうです。

映画『わすれない　ふくしま』は反原発のメッセージを前面に打ち出した内容ではありません。原発事故で全村避難している飯館村の人々の日常が淡々と描かれているだけです。私はこの映画を「しずかな反原発映画」と呼んでいます。

明確な反原発のメッセージはないかもしれません。しかしながら「日本一美しい村」といわれた飯館村の美しい農村風景は変わらない中、見えない放射能の影響で人間関係が崩壊していく様を静かに描くことでかえって原発事故の悲惨さが伝わったのではないでしょうか。

私もフランシスコ教皇の祝福をいただいたこの映画を携えて「原発を必要としない世界を創る」という望みを実現するため、一歩一歩進んでいきたいと思います。

高等学校無償化制度を通じて朝鮮学校について考える

金 敏 寛（弁護士）

1　高等学校無償化制度から排除された朝鮮高校

高等学校無償化制度は民主党政権時であった2010年４月１日に始まりました。しかし本日現在に至るまで、申請した学校のうち、全国10校ある朝鮮高校だけが、この無償化制度から排除されています。

2010年度の高校無償化に関する予算案では、全国10校の朝鮮高校を含めた予算編成がされていました。制度開始後、朝鮮高校が無償化制度の対象となるのかが国会などで検討されました。そこでのポイントは、政府は「高等学校の課程に類する課程を置く外国人学校の指定については、外交上の配慮などにより判断すべきものではなく、教育上の観点から客観的に判断すべきものである」としていました。そうであるにもかかわらず、文部科学省は朝鮮高校に対する審査を長期化させ、結局は、2012年12月に民主党政権から自民党政権に変わった後の13年２月20日、文部科学大臣は、朝鮮高校が指定の対象となるための根拠規定を削除し、全国10校の朝鮮高校に対して、不指定処分の結論を下しました。

自民党政権が発足した直後、文部科学大臣に就任した下村文科大臣は「本日の閣僚懇談会で、私から、朝鮮学校については拉致問題の進展がないこと、朝鮮総連（在日本朝鮮人総聯合会）と密接な関係にあり、教育内容、人事、財政にその影響が及んでいることなどから、現時点での指定には国民の理解が得られず、不指定の方向で手続を進めたい」と不指定の方針を発表します。

無償化制度の対象となるか否かについては、政治外交上の理由ではなく、教育上の観点から客観的に判断するとしておきながら、政府は、朝鮮学校と朝鮮民主主義人民共和国や朝鮮総連とを結びつけ、拉致等問題の進展がないことなどの政治外交上の理由をもって、朝鮮学校を無償化制度から排除したわけです。

政府が朝鮮高校を無償化制度から排除したことに関して、日本弁護士連合会をはじめとして多くの都道府県弁護士会が、憲法や無償化法の趣旨に反する行為であり、差別であると声明を出しています。また、国連の委員会が、「就学支援金制度から朝鮮学校が排除されており、そのことが差別を構成していることに懸念を表明する」、「高等学校等就学支援金制度は朝鮮学校に通学する生徒にも適用されるよう要求する」と見解を述べています。

このように、朝鮮高校を無償化制度から排除することは、憲法や無償化法に反する差別であることは明らかだといえます。

2　裁判による闘い

ところが、政府は自らの過ちを認めず、朝鮮高校を無償化制度から排除し続けたため、全国10校ある朝鮮高校のうち、東京、愛知、大阪、広島、そして福岡で裁判闘争を繰り広げることになりました。愛知と大阪は、不指定処分（2013年２月20日）よりも前に名古屋地方裁判所及び大阪地方裁判所に訴訟提起しており、その後、広島、東京そして福岡と訴訟提起する地域が広がっていきました。2017年10月31日現在で、５つの地裁のうち、３地裁（広島、大阪、東京）で判決が出ており、愛知については尋問手続を経て判決間近となっています。

無償化裁判ではいくつかの論点があるものの、被告である文部科学省が朝鮮高校を排除したのは、政治外交的な理由によるものか否かが争われています。無償化法制定から朝鮮高校が不指定処分を受けるまでの客観的事実からすれば、文科省が政治外交的理由により朝鮮高校を排除したのは明白であるにもかかわらず、被告は、無償化訴訟においてこの点を真っ向から否定しています。

この点について、大阪判決が客観的事実や証拠に基づいて真っ当な認定をしたのに対して、広島判決や東京判決は、被告の政治外交的理由

による処分から目を背けました。広島については、証人尋問及び本人尋問すら行わなかった点において、裁判所がその職責を放棄したものと評価されるほかありません。

裁判では、裁判官が証拠に基づいて自由に心証を形成して事実を認定します。

そのため、同じ事案であっても、裁判ごとに認定される事実が異なる場合があります。また、法律の解釈・適用についても、裁判官が個別に正しいと考える運用となっています。また、国の行政処分が問題となる裁判においては、裁判所が国の広い裁量を認めることが少なくなく、実質的な判断をせずに、請求者の訴えを門前払いすることも少なくありません。広島や東京判決がその例であり、原告が訴え続けてきた被告の政治外交的な理由による排除について検討することなく、国の広い裁量を認め、形式的な理由によって原告の請求を排除しています。

他方、大阪判決は、国の政治外交的理由から目を背けず、無償化制度から朝鮮高校が排除されたことに関して、実質的な判断を行ったといえます。裁判所が司法としての役割を認識し、無償化法を解釈適用したうえで、丁寧な事実認定を行ったといえます。そのうえで、政府が朝鮮学校を排除したことは政治外交的な理由によるものだと言い切ったのです。

大阪判決が実質的な判断を行ったのに対して、広島や東京判決が形式的な判断にとどまっているということは、判決書のボリュームからも明らかです。原告である朝鮮高校側においては、被告の政治外交的理由による朝鮮学校排除を明らかにすべく、文科省の役人に対する尋問を申請していますが、文科省の役人に対する尋問が実施されたのは東京のみで、他の地域においては、文科省の役人に対する尋問は実施されていません。５地域のうち３地域については判決が出ており、愛知についても既に尋問手続を終了しています。１審段階で尋問手続が残されているのは福岡だけです。その意味で、福岡での尋問必要性・重要性は高いといえます。

現在、福岡弁護団においては、全国の他の弁護団と協力しながら、文科省の役人のうちどの者が適性なのかを検討しながら、尋問申請の準備に取りかかっています。無償化裁判は、今後、高等裁判所や最終的には最高裁判所まで争われる裁判ですが、１審である福岡地裁小倉支部での尋問や判決が大きな影響を及ぼすことは間違いありません。福岡弁護団としては、なんとか文科省の役人に対する尋問を実施し、被告の政治外交的理由による朝鮮学校外しを明らかにしたうえで、裁判所が真っ当な判決を下すべく努力していきたいと考えています。

３　問題解決のために…

2017年９月14日に行われた福岡での裁判の後、報道関係者が名刺を持って私のところに寄ってきて、無償化裁判のことを知りたいので、弁護団と勉強会を開いてもらえないかとのお願いがありました。

朝鮮高校が無償化制度の対象となるために全国５箇所で裁判を行っていますが、無償化問題は単に裁判で勝訴すれば足りるわけではなく、広く世論を喚起する必要があります。そのためにもマスコミに無償化問題を取り扱ってもらい、朝鮮高校を排除することが、憲法や無償化法に反する差別であり、政府が政治外交的な理由から排除したことを広く知らしめる必要があります。

朝鮮学校に対する差別は今に始まったことではありません。日本政府は戦後から一貫して朝鮮学校を目の敵にして、弾圧を継続しています。政府の朝鮮学校に対する姿勢がそうであるからこそ、在特会による京都朝鮮初級学校襲撃事件のような痛ましい事件が起きるのです。

朝鮮学校イコール「北朝鮮」、「朝鮮総連」であり、そこに通う子どもたちも絶対悪なのだと決めつけるのではなく、朝鮮学校とは本当のところどんな学校なのだろうか、そこに通う子どもたちはどのような子たちなのだろうかと、自分の目で見て感じる必要があると思います。

無償化制度を通じて朝鮮学校のことを知ってもらい、一人でも多くの方が朝鮮学校を応援してくれることを願ってやみません。

第8回 小さな泉が川となる

アドベント！
光ある方の到来を待ちのぞみ
その愛する人々に愛と正義で
平和を築いていく時間

朴庚美　パク・ユミ（フリーランサー）

写真（右）は、304人が犠牲になったセウォル号事故があった2014年、ソウルのイエズス会センターに、待降節の黙想とともに建てたクリスマスツリー「光の庭」です。304個の星、そして白い雪の花に変身した鈴に、皆が祈りを込めました。それは、平和、人権、軍縮、労働、真実究明、家族、愛、信仰…そして、大小の丸太彫刻には、地球村に住む人々の顔を描きました。それは、グローバル化された今日の私たちの社会で一緒に生きていく多くの移住者、労働者、そして孤独に苦しむすべての人々とその人々を世話する人、またその人々と共にあろうとされる教皇様。神さまのあわれみのうちで、私たちは誰もが平等であり、このように一つの共同体をつくっています。

光を待ちのぞみ、暗いほどに明るく、冷たいほどに暖かい力を授ける方の中で、私たちの心を明るくしてくれる小さな光のぬくもりを感じ、ひときわ寒い冬を過ごす人々を記憶しました。私たち自身が、誰かの望みをかなえるサンタクロースになることを祈りました。そのための力を得て、疲れず強く、小さな光の一つ一つが調和して、共に生き、平和をつくっていくことを祈りました。

北朝鮮の核廃棄を強調しながら、一方では、公然と戦略核兵器の配置を取り上げている状況が、北東アジアの平和を脅かしています。反核平和を叫び、実際にすぐに被害を受けうる当事者たちの意見が反映される民主的な手続きを強く求めても、お金と武力、力の優位を掲げる論理によって、相変わらず多くの人たちが長い戦いに追い込まれているのが、今日の私たちの現実です。歴史的に積み重なった害悪を清算せず、むしろ力のある国は、資本をめぐる新しい方式の民族対立、左右対立の葛藤を助長しています。ここに連なる多くの問題、そして生命と安全な生活を脅かされる多くの人たち…。

解放を迎えた後も祖国は分裂され、ほとんど着の身着のまま戻らなければならない条件下で、日本に残るしかなかった多くの朝鮮人たち。母国の言語を話すことも書くこともできない子どものための言語教育でつながり、建てられた「ウリハッキョ（私たちの学校）」に対する韓国と日本政府の差別もそうした問題の一つです。

朝鮮学校の生徒構成は、韓国国籍60%、日本国籍10%、朝鮮籍は30%であるのに、北朝鮮との関係を理由に高校無償化措置から除外されています。南北が分かれ北朝鮮の支援を受けるしかなかったその理由や、彼らの生活背景は見向きもされません。しかしそれでも、彼らの人生の物語には、彼らの苦痛に関心を持ち、根気強く人に知らせ、彼らと共にあろうとする人々がいます。演劇や映画に携わる人々が集まり、小さな会を始め、人々の共感を得てもっと多様な集まりとなり、「モンダンヨンピル（ちびた鉛筆）」という、登山、公演、映画上映などの文化プログラムで交流の場を作る団体となりました。何年も一緒に生活しながら、体験を分かち合い、人生をつくっていく人々。彼らが過ごした時間と努力が基となり、その理解が伝播されていきます。慰安婦被害者の方々が一つの時代の犠牲者であるなら、<朝鮮学校>の問題は世代を越えて続く在日朝鮮人たちの生活の問題です。

多様な人たちを示す丸太彫刻のサンタクロースのように、多様な姿で多様な役割として使われて残った<ちびた鉛筆>たち。

光を待ちながら小さな光を集めて暖かく、影を照らして、共に愛と平和をつくる人たち。この人々の時間こそが、本当に光に向かうアドベントです。

【まちがいさがし】↑この絵の中にいつもと違うところがいくつかあります。①まちがい（いくつでも）、②お名前、③ご住所をハガキに書いて、「正義と平和協議会」までお送りください。12月15日消印有効。正解に近い順3名様に何かが当たります。発表は発送をもって代えさせていただきます。

目次

1 特集　となりのウリハッキョ(朝鮮学校)
ウリハッキョへつながる手引き …… 中井　淳

3 わたしのウリハッキョ …… 李 鮮 芽

4 ウリハッキョインタビュー

7 僕たちの声を聞いて下さい …… 崔 勇 太

8 ひとつぶ
原発のない世界を目指して …… 古泉　肇

9 高等学校無償化制度を通じて朝鮮学校について考える …金 敏 寛

11 連載第8回　小さな泉が川となる …… パク･ユミ

12 まんが「ポストランテの石橋さん」

表紙写真　2014年韓国イエズス会センター（ソウル）のクリスマスツリー「光の庭」➡ P.11「小さな泉が川となる」参照。

各地からの報告

正義と平和 えとせとら…

死刑廃止を求める部会より

「死刑執行停止を求める諸宗教による祈りの集い」（10月25日）

「死刑はそれ自体、福音に反しています」。教皇就任以来、折に触れ、死刑廃止を繰り返し訴えている教皇フランシスコは、2017年10月11日、『カトリック教会のカテキズム』の25周年を祝う場でのスピーチで、こうはっきりと明言しました（10/22付「カトリック新聞」1面参照）。

「死刑廃止を求める部会」は、諸宗教や多くの市民団体などと連携しながら死刑制度廃止の活動をしています。

10月25日、超教派のネットワークである「死刑を止めよう」宗教者ネットワークが毎年開催している「死刑執行停止を求める諸宗教による祈りの集い」が、都内のカトリック教会で行われました。東京での開催は実に7年ぶりです。仏教・神道・キリスト教系の諸宗教が祈りをささげ、死刑廃止を求めるメッセージを発表しました。また、多くの市民団体や弁護士からも連帯の挨拶がなされ、箏と尺八の演奏を聴きながら、いのちと死刑について考える時間を持ちました。

そもそもこのネットワークが誕生したのは、ローマで生まれたカトリック国際NGO「聖エジディオ共同体」のおかげです。彼らが2003年に日本で行った「生命のために連帯を」という死刑廃止の集会に参加した宗教者たちが発起人となって、この連帯の絆が築かれていったのです。今回、その聖エジディオ共同体のアルベルト・クァットルッチ事務局長をローマからお呼びしました。そして10月28日に東京で、死刑廃止をはじめとした、いのちを守るための取り組みについて、「友情」というキーワードを中心に語ってもらいました。こうした活動の報告やカトリック教会の立場などは、当部会が発行しているニュースレターに掲載しています。「死刑廃止を求める部会」からの情報をご希望の方は、正義と平和協議会事務局にご連絡ください。　（死刑廃止を求める部会・柳川朋毅）

Jp通信 VOL. 207 2017 DEC.

発行日　2017年12月1日（隔月発行）
編集発行　日本カトリック正義と平和協議会
〒135-8585　東京都江東区潮見2-10-10
TEL.03-5632-4444 FAX.03-5632-7920
E-mail　jccjp@cbcj.catholic.jp

購読料　年 1,500円（送料共）
郵便振替　00190-8-100347
加入者名　カトリック正義と平和協議会
http://www.jccjp.org